

トークイベント

「乱歩をテレビドラマにする方法」——
NHK『探偵ロマンス』制作秘話」報告

王 羽 萌

二〇二三年一月二十一日、NHK制作・配信の土曜ドラマ『探偵ロマンス』第一話が放送された。翌日、ドラマの放送開始をきっかけに、NHKと大衆文化研究センターの共同主催で、「乱歩をテレビドラマにする方法——NHK『探偵ロマンス』制作秘話」と題するシンポジウムが立教大学池袋キャンパスで開催された。同大学の学生だけでなく、江戸川乱歩、その周辺を題材とするドラマの魅力をできるだけ多くの人に伝えるための一大イベントである。

「探偵ロマンス」は従来の乱歩作品を主眼とする映像作品とは異なり、探偵小説作家としてデビューする前の江戸川乱歩こと平井太郎を主軸とする作品だ。筆者自身も、平井太郎を主人公にどのようなストーリーが出来るのかといった点に注目しつつ参加した。登壇者はNHK大阪放送局所属、『探偵ロマンス』制作統括担当の櫻井賢氏（司会）、演出担当のディレクター・安

達もじり氏、美術デザイン担当の瀬木文氏、ドラマの企画書を作り同時に演出担当の大嶋慧介氏、映像編集担当の佐藤秀城氏である。

午後二時、会場は開始前の緊張な雰囲気と豊富多彩な内容への期待でみまぎっていた。概観すると、登壇者による「制作秘話」を語り合う部分と、質疑応答の部分に分けられる。

まず、『探偵ロマンス』の成立について、「海外に発信できるオリジナルドラマ」の内部企画募集に応募し、「若い視聴者にも観ていただきたい乱歩活劇（エンターテインメント）」を作る」ことが出発点であると大嶋氏が語っていた。さらに、櫻井氏によれば、通常、テレビドラマの制作過程として、まず物語の大筋すなわちプロットを提示してから段階ごとに進めていくが、『探偵ロマンス』は台本やプロットが最初の段階では提示されず、「作りたい」という気概から始まったという。

『探偵ロマンス』の世界の成り立ちをめぐって、安達氏と瀬木氏が舞台設定の「イメージボード」について紹介していた。乱歩の「真髓」を考えたときに、「現実社会へ渴き」、「赤と黒」、「社会階層の差」といったキーワードが挙げられた。これを踏まえて、安達氏は「スピード感のある世界」、西部劇のような「ドライ」な世界を作りたいと語った。実際の映像でも、真昼の太陽のもとで登場人物の動きが一目瞭然のような明るい場面が多く見られる。さらに、瀬木氏は安達氏のイメージに沿って場面のイメージスケッチを作成した。いわゆる「時代考証」の制限をはずし、乱歩が生きてきた時代の資料を読み込むと同時に、「海外発信」を意識しつつ、貧富の差が織りなす荒廃の世界に「アジアテイスト」を取り入れてみたという。つまり、「時代考証」をもとに還元された「大正時代」というよりは、乱歩の時代を起点に、アジアのスラム街に大正時代の要素を取り入れたという多面的な空間を見せたいのだ。

企画、構想、そして世界観の創出、次はいよいよ撮影に移す。リアリティを担保するために、役者にその時代を体感してもらうことがあり、例えばごみ袋など臭いを発するセットを作った

など、様々な工夫がなされているという。これらは映像に映さないが、雰囲気作りにとって欠かせない要素である。さらに、アクションシーンを意識的に取り入れたため、役者の実演アクションも見どころの一つであるという。

「制作秘話」が酣となった頃、参加者との質疑応答に移した。まず、ドラマの題材として、なぜ「乱歩作品」ではなく「乱歩」なのか、制作するとき今までの江戸川乱歩の映像作品をどのように意識しているのかといった質問が上がった。安達氏は、先行作品を意識しつつもそこは距離を置いて、あくまでも小説からヒントを探したと述べた。瀬木氏も、乱歩が「何を見てそれを言葉にしていくのか」を主眼として、そこにファンが楽しむディテールを織り込んだと語った。ほかにも、「若者の群像劇」のイメージを重要視することから若手俳優を起用したキャストの撮影、編集作業について様々な話題に花を咲かせた。「制作秘話」の語り合いというラックスとした雰囲気、で、「乱歩」を「テレビドラマ」にする試みとその可能性を見せてくれた貴重な時間であった。

（本学大学院博士後期課程）